

375.9  
Ta11  
資料室

普通讀本

高橋熊太郎編

四編下



30273 ✓  
教科書文庫  
3  
810  
41-1887  
20003  
01465

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

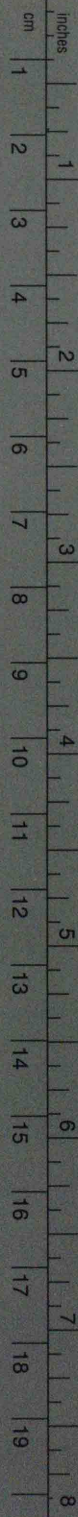


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



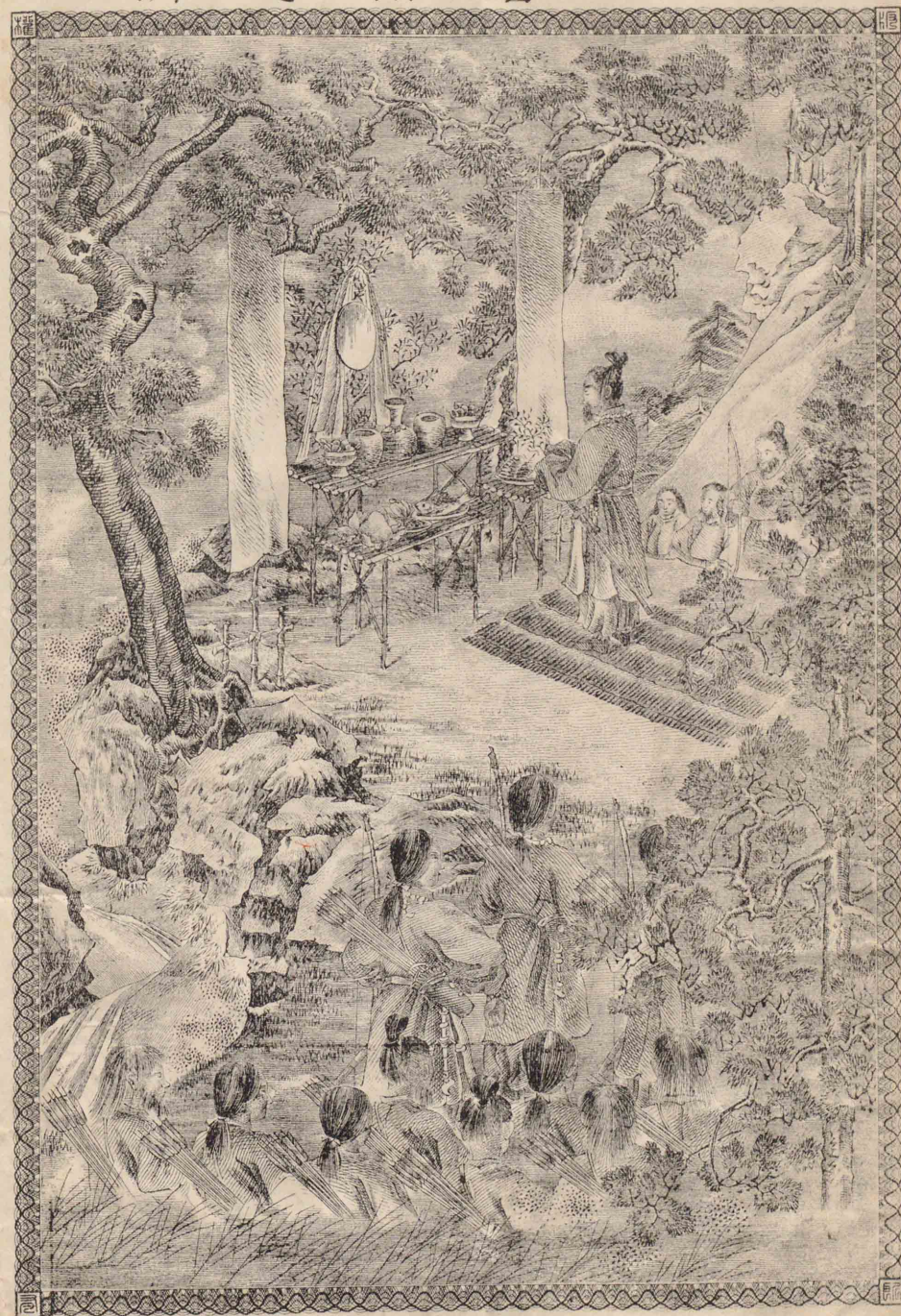
資料室

375.9

Ta 11

廣島大學  
圖書印





普通讀本四編下

高橋熊太郎編

第一課 産業

耕耘。天然。増殖。維。原料。肥沃。瑞穂。渾。嘉穀。筏。釣。網。介。捕獲。海藻。

人ノ産業ハ種々ニ分ルト雖モ農漁工商ヲ尤モ多シトス。今次ニ此四ツノ産業ヲ略記スベシ。農業トハ田圃ヲ耕耘シテ五穀蔬菜果實等ヲ培養シ或ハ牛馬羊豚蠶等ヲ



畜ヒ、又樹木ヲ山林ニ植ウル等總テ天然ノ  
産物ヲ増殖スルコトヲ務ムルモノニシテ、  
此業ヲナス人ヲ農夫ト云フ。農業ハ、人間  
生命ヲ維グノ食ヲ供シ、其寒暑ヲ防グ、衣服  
ノ原料ヲ給スルモノナルガ故ニ、世界何レ  
ノ國ニテモ、之ヲ必要ノ業トシテ務メザル  
モノナシ、殊ニ我ガ日本國ハ、氣候溫暖、地味  
肥沃ニシテ、尤モ米穀ニ適スルヲ以テ、古ヨ  
リ其産多ク、瑞穂ノ國ト稱シテ、渾テ農業廣

ク行ハレテ、嘉穀ヲ出スコト夥シ。漁業ト  
ハ、河海湖澤ニ船筏ヲ浮ベテ、或ハ釣シ、或ハ  
網シ、又ハ水中ニ潜入シテ、魚介ヲ捕獲シ、海  
藻ヲ採收スルコトヲ務ムルモノニシテ、此  
業ヲナス人ヲ漁夫ト云フ。我が國ハ、四方  
海ニ濱シテ、水産ニ富メルガ故ニ、沿岸及ビ  
島嶼ノ居民ハ、大半漁業ニ從事セザルモノ  
ナシ。

第二課 前課ノ續

修。鑛山。採掘。製煉。填補。運搬。轉輸。

工業トハ、吾人ノ常用スル、凡百ノ器具物品ヲ製シ、衣服、船車等ヲ作り、家屋ヲ建ツルヲ首トシ、道路、橋梁ヲ修メ、鐵道、電線ヲ設ケ、其他、金銀、銅鐵、石炭類ヲ鑛山ヨリ採掘シテ製煉スル等ニ至ルマデ、概テ天然産ニ、人工ヲ施スコトヲ務ムルモノニシテ、此等ノ業ヲナス人ヲ職工ト稱ス。商業トハ、農業、漁業、工業等ニヨリテ産出スル諸物品ヲ、諸方ニ

運輸シテ賣買スルコトヲ務ムルモノニシテ、其遠ク外國ト賣買スルヲ通常貿易ト稱シ、渾テ此等ノ業ヲナス者ヲ商人ト云フ。畢竟内國ニハ賣買ト云ヒ、外國ニハ貿易ト云フモ、本ト此ニ有ル所ノ物ヲ以テ、彼ニ無キ所ヲ填メ、彼ニ餘ル所ノ物ヲ移シテ、此ニ乏キ所ヲ補フノ謂ヒニシテ、商人ハ、即チ其運搬、轉輸スル間ニ居リテ、其手数料ヲ收ムル者タルニ外ナラザルナリ。

第三課 砂漠の舟

砂漠。際限。焦。射。苦悶。飢。由。晦冥。艱難。輿。駱駝。異名。

亞細亞と亞非利加との内地より、砂漠多し。こ此砂漠と云ふ處に、際限もなき砂原にて、固より人家もなく、樹木もなし。日光炎々として砂を焦くときは、其熱面を射て苦悶耐へ難し、飢うるも食を得ること能はず、渴むるも飲を求むるも由なし。時ありて



は怒風砂を卷きて、天地も爲めに晦冥となり、人其下より埋めらるることあり、こ此地を渡る旅客の艱難想ひやるべし。然をども幸に「オアシス」と名くる肥沃の小土ありて、其狀海中の島あるが

普通言 四  
如く、此は樹木も茂り、泉も湧き出で、大に旅客の疲勞を慰むべし。茲に此地を過ぐる乃旅客を載せるものあり、舟はあらず、車はあらず、馬にあらず、又輿はあらず、即ち駱駝と名くる獸なり、故に駱駝を異名して砂漠の舟と云へり。

第四課 前課ノ續

體軀。構造。足。蹠。膝。胸。椅褥。跪。鼻孔。胃。水胞。肉峰。剩餘。資。騎乘。

駱駝ハ體軀ノ構造自ラ砂漠ヲ過グルニ適シ、足蹠ハ扁平ニシテ厚皮ヲ被リ、砂上ヲ歩スルニ便ナリ、膝及ビ胸部ニハ、椅褥ノ如キモノヲ具ヘテ、跪ク其上ニ坐ス。鼻孔ハ自由ニ開閉シテ、風砂ノ入ルヲ防グベク、胃ニハ水胞アリテ、巨量ノ水ヲ容ルベク、背ニハ肉峰アリテ、養分ノ剩餘ヲ貯フベシ。性柔順ニシテ能ク重ヲ負ヒ、且ツ飢渴ニ堪フルヲ以テ、商旅ハ皆之ヲ資シテ、或ハ騎乘

シ或ハ貨物ヲ運搬セシム。其肉及ビ乳汁  
ハ、飲食ノ料トナスベク、其皮ハ革ヲ製スベ  
シ。

第五課 象ノ話

蒼灰色。靈敏。牽挽。

汝等嘗テ象ヲ見タルコトアリヤ。象ハ亞  
細亞及ビ亞非利加ニ産スル大獸ニシテ、高  
サ八尺ヨリ一丈ニ達シ、皮ハ概子蒼灰色ニ  
シテ、白色ノモノハ極メテ稀ナリ。鼻甚ダ



長ク上下左右自在ニ  
運轉シテ、殆ド手ノ如  
ギ用ヲ達ス。其牙亦  
頗ル長クシテ、重サ六  
貫目ヨリ十貫目ニ至  
ル、所謂象牙是ナリ。  
性靈敏ニシテ能ク物  
ヲ記憶ス、常ニ河邊ノ  
林中ニ棲ミ、出入群ヲ



ナス、群ゴトニ必ず長アリ、群象皆其後ニ隨  
ヒ、行止一二其命ニ從フ。土人之ヲ馴養シ  
テ、騎乘牽挽ノ用ニ供スルコト、猶ホ我が牛  
馬ニ於ケルガ如シ。其牙ハ採リテ、諸般ノ  
器具ヲ製スベク、皮ハ柔韌ナレバ、亦諸用ニ  
供スベシ。

第六課 亞麻。

船齋。亞麻仁油。印刷。晒。織緯。精良。無慮。壑。兩。  
亞麻は麻の一種にして、近年西洋より船齋

せしむるなり。其實ハ搾りて多くの油を  
得、亞麻仁油と稱せらるは即ち是なり、藥用に  
供し、印刷の墨汁ニ用ひ、又家屋、船車を塗る  
のペンキを製せし。又其莖は、水に晒し  
て織緯を裂き、糸と一織き、バ精良の布を得  
べし、之を亞麻布と云ふ、夏日の衣服に製し  
て佳なり。凡そ亞麻は耕作は、歐米諸國に  
於て盛ニ行われ、油とし布とし、他國ニ輸出  
するは量最も夥し、我が邦ニ於て年々買入

る高も、無慮數十萬圓に下らず。誠に山野を開き、無用の地を墾し、之を植ゑて其産を收め、油布等、兩をがら外國に仰せざるに至らば、國を利すること莫大ならん。

第七課 コロンブスノ小傳

伊太利、英邁、實驗、微、推、以爲、慨然、跋、涉、資、裝、援、藉、遊、說、零、落、迫、毫、挫。

コロンブスハ、伊太利國ノゼノアノ人ナリ。天資英邁ニシテ、幼年ヨリ航海ノ事ヲ好

ミ、長ズルニ及テ、頗ル其術ニ通ジ、屢海洋ヲ渡航セリ。既ニシテ實驗ニ徴シ、算數ノ理ヨリ推シテ、世界ノ圓體ナルヲ悟リ、自ラ以爲ラク、地ハ圓體ナレバ、西ニ向テ航スレバ、遂ニ東ノ地ニ達スルヲ得ベシト、乃チ慨然トシテ、遠洋ヲ跋涉シ、正シク其實ヲ究メント決心シタリ。然レモ、家素ヨリ貧ニシテ、資裝ヲ辦ズベキノ方ナケレバ、時ノ王公富人ノ援ヲ藉ラント思ヒ、コレヨリ諸國ニ遊

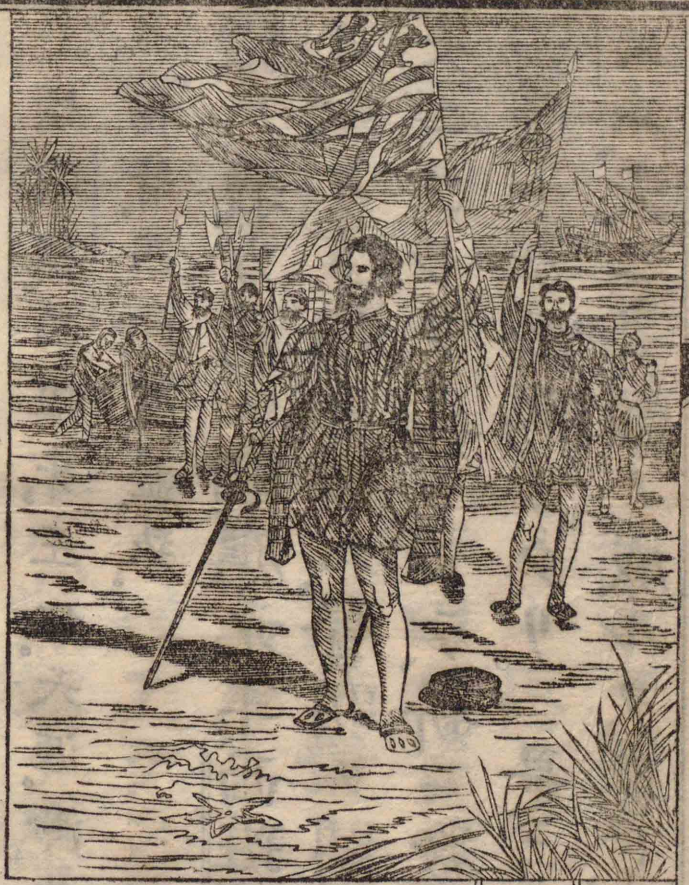
說セリ。其頃人智未ダ開ケズシテ、人皆世  
 界ハ平坦ナルモノト思ヒケレバ、敢テ其說  
 ニ服スル者ナク、皆曰ク、若シ世界ヲ圓體ナ  
 リトスレバ、我レト趾ヲ對スル國ノ人ハ、皆  
 倒マニ歩ミ、雨ハ地上ヨリシテ、天ニ降ラザ  
 ル可ラス、何ゾコノ理アラシヤト、大ニ笑ヘ  
 リ。コロンプスハ、艱難ヲ忍ベ、氏之ガ爲メ  
 ニ零落シテ、一時ハ飢渴ニ迫ルニ至レリ、然  
 レ氏毫モ志ヲ挫カズ、飽マデ之ヲ果サント

セリ。

第八課 前課ノ續

頃。明應。西班牙。王妃。天涯。渺茫。遮。幾。撫御。備。  
 宿昔。西印度。蓋致。

頃ハ我が國ノ明應元年、西班牙國ノ王妃イ  
 サベラト稱セシハ、賢明ノ聞工高カリシガ、  
 大ニコレヲ嘉ミシテ、新ニ數艘ノ大船ト、航  
 海費トヲ給賜シタリ。是ニ於テコロンプ  
 スハ、大ニ素願ノ成ルヲ喜ビ、乃チ同年八月



遮ルモノナク、舟子皆歸思アリ、幾ド撫御ニ  
 苦ミ、備サニ艱難ヲ嘗メシガ、少シモ屈セズ

三日ヲ以テ、西  
 班牙ノ港パロ  
 スヲ出帆シ、西  
 ニ向テ航行セ  
 リ。初メ數月  
 ノ間ハ天涯渺  
 茫トシテ目ニ

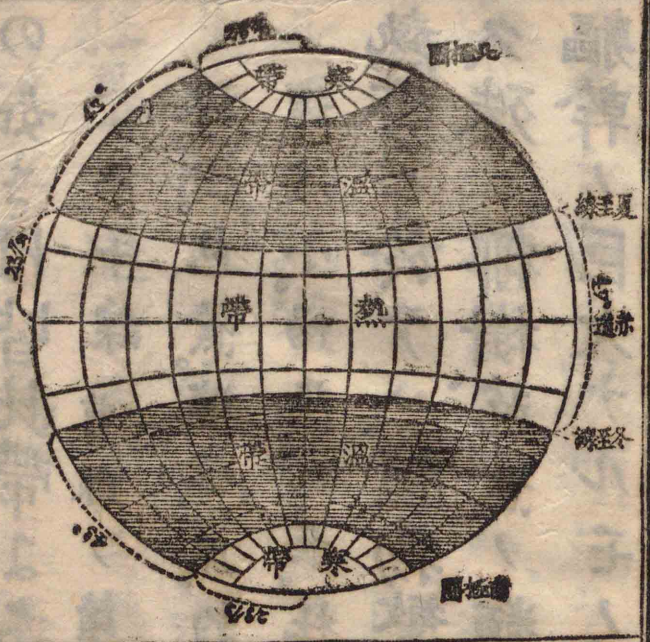
シテ一ノ陸地ヲ發見シ、宿昔ノ志ヲ達スル  
 ニ至レリ、因テコレヲ西印度ト名ヅク、蓋シ  
 當時知ル所ハ印度ノ西部ナリト思ヒシナ  
 リ。後又亞米利加大洲ヲ發見シテ、永ク大  
 名ヲ天下ニ留ムルヲ致セリ。

第九課 地球の五帶。

一 圈。兩斷。赤道。夏至線。熱帶。斜射。北極。極寒。  
 凜冽。

地球表面の中央に一圏を畫して、南北を兩

断す。此圈線を名けて赤道と云ふ。赤道より南北各二十一度半の處に、又圈線を施す。其北なるを夏至線と云ひ、南なるを冬至線と云ひ、此二線の間を熱帯と云ひ、夏至線より北四十三度半の處に北極圈あり、この間を北の温帯とし、冬至線より南四十三度の處に南極圈あり、この間を南の温帯とす。又北極圈より北二十一度半の處、即ち北極に至るまでを北の寒帯とし、南極圈より南二十



十三度半の處、即ち南極に至るまでを南の寒帯と稱す。熱帯の地は、太陽直射の下にあるを以て、氣候終年炎熱なまども、寒帯の地は、其斜射を受け、時として、久しく太陽を見ざるこゝろあり、故に、亘寒凜冽、冰雪盡くる期無し、獨り温帯

は、其中間にあるを以て、氣候亦中和を得、寒暑共に甚しからば、日本支那歐羅巴諸國の如きは、皆此帶にあり。

第十課 前課ノ續

椰樹。芭蕉。獐。猛虎。豹。犀。孔雀。蟒蛇。叢澤。鱈魚。逞。矮小。暢茂。樺木。杜松。苔蘚。馴鹿。

熱帶ニ於テハ、植物繁茂シ、從テ種類モ夥シク、殊ニ椰樹芭蕉ノ類ニ富メリ、其動物ニハ軀幹ノ巨大ナルモノ、及ビ性情獐猛ナルモノ

ノ多シ、即チ獸類ニテ大ナルハ、象河馬駱駝等トシ、猛惡ナルハ、獅虎豹犀等トス、鳥類ニテハ巨高ナルコト、駝鳥ノ如キアリ、美麗ナルコト孔雀ノ如キアリ、又深林ニハ蟒蛇アリテ、間人ヲ害シ、叢澤ニハ鱈魚アリテ、往々狂暴ヲ逞ウス、實ニ飛潜動植ノ盛ナル處ト云フベシ。温帶ノ動植物ハ、熱帶ニ比スレバ、其數其種共ニ少ケレ、有用ノモノニ富メリ、其猛惡ニシテ人ニ害アルモノハ、僅ニ

熊、狼、野猪等ノ數種ニ過ギズ。寒帶ニハ動物植物共ニ極メテ尠シ、植物ハ大抵矮小ニシテ暢茂セズ、樺木、杜松、苔蘚ノ類アルニ過ギズ、ソノ動物ニシテ最モ有用トスルハ、獨リ馴鹿ノミ。

第十一課 空氣。

屢。空氣。詳。包。大約。棲息。稀薄。透明。扇。觸。

汝等屢空氣トイフ語ヲ聞キツラン、然レモ未ダ何物ナルヲ詳ニセザルベシ。抑、空氣

トハ、我が地球ヲ包メル氣體ニテ、大約二十五里許ノ高サマデ漫コリ、人其中ニ在リテ棲息ス。空氣ノ人ニ必要ナルハ、猶ホ水ノ魚ニ缺クベカラザルガ如シ、サレド空氣ハ其質極テ稀薄ニシテ、無色透明ナルガ故ニ、人常ニ目ニ視體ニ覺エザルナリ。然レモ空氣モ積テ厚キニ至レバ色アリ、天氣晴朗ノ日、仰テ大空ヲ望ムニ、其蒼々タルヲ見ルハ、空氣ノ色ナリト云フ。且ツ夫レ空氣ハ、

常ニ體ニ覺エザレバトテ、若シ急ニ走リ、又ハ掌ヲ開テ烈シク扇ガバ、忽チ物ノ吾レニ觸ル、ヲ感ズベシ、是レ空氣ノ實體アル證ナリ。

第十二課 空氣の流動

流動。緻密。顯象。上騰。填。係。

空氣の流動せるも、之を風と云ふ。凡そ地球上各地の溫度常ニ相等しからば、寒冷なる處あり、溫暖なる處あり。溫暖なる處

の空氣は、稀薄にして軽く、寒冷なる處の空氣は、緻密にして重し、輕きものは昇り、重きものは降る、而して其昇降に由りて、遺す所の空處ハ、まゝと他より來る空氣を以て、之を補ふ。斯く空氣の交互往來せるものは、即ち風の顯象あり。試に廻り燈籠を見よ、燈籠内ハ空氣ハ、燈火ニ熱せられたる上騰し、冷氣下より代りて、其跡を填む。此のごとく空氣の交代せる際ニ、風を起し、廻り燈籠



の羽は廻るなり。又暖室の戸を開くこと  
 三寸許、其上下に二、の燭火を置くときは、上  
 燭ハ火炎外ニ向ヒ、下燭ハ内ニ向フを見る  
 べし、是を室内の空氣は、軽くして上行し、室  
 外の空氣ハ、重くして下行し、内外相交代を  
 る証なり。地上に風の吹くも、亦此理不  
 外ならずして、其原因ハ皆温熱の作用ニ係  
 るなり。

第十三課 前課ノ續

間斷。朝暮。帆船。出津。尋。吸收。放散。空隙。地  
 嵐。

赤道直下ハ、日光直射シテ、暑熱常ニ甚シキ  
 ガ故ニ、其處ノ空氣ハ、上昇シテ間斷ナシ、因  
 テ南北兩邊ノ冷氣、此空處ヲ補ハンガ爲メ  
 ニ、各赤道ニ向テ吹キ、常ニ方向ヲ一定セリ、  
 此風ヲ名ケテ貿易風ト云フ、蓋シ昔日、帆船  
 ノ通商ニ便ナリトセシヨリ起レルナリ。  
 温帶地方ノ風ハ、或ハ北或ハ南、又西東等、其

變化定ムベカラズト雖モ、海邊ノ地ハ、朝暮ノ風向率子一定セリ、之ヲ海陸風ト稱シ、帆船ハ皆之ヲ以テ、入口出津ノ便トス。抑、此風ノ原因ヲ尋ヌルニ、陸ハ海ニ比スレバ、熱ヲ吸收スルコト速ナレバ、之ヲ放散スルコトモ亦速ナリ、故ニ晝間日光ヲ受クル片ハ、陸地先ヅ熱シ、其處ノ空氣爲メニ稀薄トナリテ上昇シ、從テ海上ノ冷氣、其空隙ヲ充サント欲シテ來ル、即チ入船ニ便ナルノ風ナ

リ。又日没スレバ、陸地先ヅ冷工、海面ハ仍ホ暖ニシテ、恰モ冷暖地ヲ易フルガ故ニ、空氣ノ流動モ、晝間ト其方向ヲ反對ニシテ、陸ヨリ海ニ向テ吹ク、即チ出船ノ風ニシテ、舟子之ヲ夜ノ地嵐ト唱フ。

第十四課 輕氣球

塞子。梯子。大厦。差。須臾。輕氣球。墜落。冲浮。蔽。辦。啓。洩出。

塞子若クハ、木片ヲ水中ニ推シ入レ、手ヲ放

ツ片ハ、復タ忽チ昇リテ、水面ニ浮ビ出ヅ、是レ水ハ、塞子及ビ木片ヨリ重キニ由レリ、即チ水下降シテ、塞子ヲ推シ上グルナリ。又試ミニ梯子ヲ、大厦高屋ノ内ニ架ケ、之ニ登リテ、天井ニ近ヅク片ハ、其空氣ノ床ノ邊ニアルモノニ比スレバ、差温ナルヲ覺ユベシ。是レ温ナル空氣ハ、冷ナル空氣ヨリ輕キニ由ル、即チ冷ナル空氣ハ、重キガ故ニ降下シテ、温ナル空氣之ガ爲メニ推シ上ゲラル、

ナリ。人アリ嘗テ此理ヲ推考シテ以爲ラク、空球ニ充スニ温ナル氣ヲ以テセバ、善ク之ヲシテ、空中ニ飛揚セシムルヲ得ベシト。是ニ於テ、紙或ハ絹ヲ以テ空球ヲ作り、一ノ孔ヲ設ケ、其孔ヲ下ニ向ケ、燈火ノ上ニ支ヘテ、球ヲ燒クニ至ラザラシム。須臾ニシテ燈火ノ熱ニ由リ、球内ノ空氣温ヲ加ヘ、從テ輕クナルニ由リテ、球ハ自然ニ高ク空中ニ騰飛シ、燈火滅スルニ至ルマデ、復タ下ル

普通話ノ四編下

集英堂出版

コトナシ、是等ノ球ヲ名ケテ、輕氣球トハイ  
 へリ。其後球ノ製ヲ大ニシ、殆ド家ノ如ク  
 ナルモノヲ作り、其下ニ籠ヲ懸ケ、人ヲ其中  
 ニ坐セシムベクス。因テ橐ヲ以テ火ヲ焚  
 キ、即チ球内ノ空氣ヲ甚ダ温ナラシメ、以テ  
 人ヲ乗セテ高ク空中ニ昇リ、雲ヲモ凌グニ  
 至ラシム、其人降ラント欲スル片ハ、火ヲ滅  
 スレバ、球内ノ氣漸ク温ヲ失ヒ、氣球從ヒテ  
 徐々ニ地ニ落ツ。既ニ一人ノ輕氣球ニ乘

シテ、空ニ騰レリトイフコト、忽チ四方ニ傳  
 聞スルニ及デ、輕氣球ヲ放チ、空中ニ飛遊セ  
 ント企テシモノ甚ダ多シ。然レモ、空氣ヲ  
 熱スル爲メニ、火ヲ用ヒタルガ故ニ、往々誤  
 テ球ヲ燒クコトアリ、斯ノ如キ時ニハ、其人  
 絶高ノ所ヨリ、地ニ墜落スルヲ以テ、復タ生  
 命ヲ全ウスルモノナシ。因テ更ニ工夫シ、  
 遂ニ球ヲシテ浮輕ナラシムルノ、良法ヲ發  
 明スルニ至レリ、其物ハ即チ石炭瓦斯ニシ



ニ上レバ、空氣甚ダ稀薄ニシテ、氣息ノ苦悶ヲ覺エ、殊ニ寒冷甚ダシケレバ、氣球屢雪ニ

テ、甚ダ輕キヲ以テ之ヲ大球ニ充タストキハ、能ク二三人ヲ乗セ、空中ニ冲浮マルニ足レリ。人往々輕氣球ニ乘リテ、高ク雲外ニ出ヅルコトアリ、此際

蔽ハル、コトアリ。若シ球ヲ降サント欲スルトキハ、繩ヲ引キテ、小窓ヲ密閉セル辨ヲ開キ、多少ノ瓦斯ヲ洩出スルナリ。

第十五課 林中の返響。

獨吟。停。四顧。隻影。嗚呼。誰。某。嘲弄。痴漢。鞭。返響。震搖。宜。

少年あり、一日林間に遊歩し、行獨吟せし、林中亦人ありて相和する、如く少年異々歩を停めて四顧をる、絶て隻影なし、再び

吟をきば、林中復と吟聲あり、試みに鳴と呼ぶ。林中同トく鳴と應ふ。少年は益異と、汝は誰れぞと曰ふ。林中又汝は誰れぞと答へり。少年曰く、吾は某なり。林中亦曰く、吾は某なり。少年曰く、汝何をきり吾を嘲弄する。林中亦曰く、何をきれぞ吾を嘲弄すると。少年は大に怒り、大聲に呼で曰く、痴漢吾今汝を鞭つべし。林中曰ふ所亦相同ト。是に於て、少年は甚と恐怖し、走りて家へ歸り、

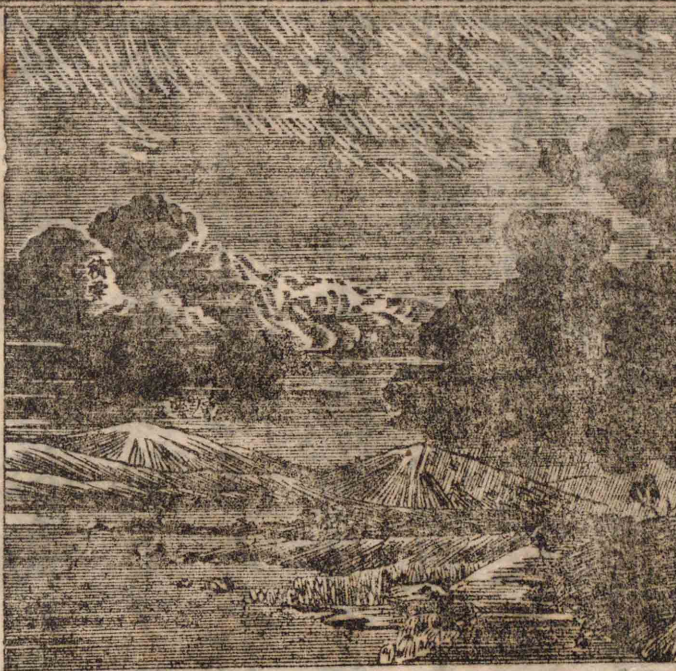
具を父に告げ、きば、父曰く、これ返響と云へるものなり、居れ汝に其故を語らん。試に池中に石を投じて、波立とむれば、波は必ず輪をふして、四方に進行し、岩石等と觸るゝを俟て、再び返動を見る者なり、林中の聲も亦此理に異ならず、初め汝の聲は空気に震揺を起せり、これ震揺直に進行して、樹木等の固體と觸れ、爲めに再び返り、汝の耳へ入りたるも此なり、故に汝の聲と相

同じきを聞く、固に宜なり。然きども我と物との間、甚ど近けきば、其返響は吾の發聲と同時、耳に入るが故に、之を辨知する能は、又甚ど遠きをば、震波消滅して、耳に入るに由なし。少年の之を聽て、始めて心を安んじ、今は暇日毎に林間に入り、却て其返響を聞くを樂とせしむ。

第十六課 雲ノ形狀

凝聚。通湯氣。層雲。山脈起伏。掩。

春ノ日ノ麗カナルヲ遮リ、秋ノ月ノ朗カナルヲ隱スハ、皆雲ナリ、此雲ハ元ト何ニヨリ起ルカ。雲ハ水氣ノ凝聚シタルモノナリ、太陽先ヅ光ト熱トヲ放チテ、遍ク地上ヲ温ムレバ、河海池沼ノ水、則チ蒸氣トナリテ發散スルコト、鐵瓶ヨリ湯氣ノ發スルガ如シ、此水氣ハ、常ニ空氣中ニ混ズレバ、目ニ見ルヲ得ザルガ故ニ、人之ヲ知ル無キナリ。然レバ、一旦輕暖ナル空氣ト共ニ、高ク空ニ昇



クニシテ淡キモノアリ。積雲トテ煙ノ如ク又雪山ノ重ナルヲ見ルガ如キモノアリ。

リテ寒冷ノ氣ニ遭ヘバ、忽チ凝リ聚リテ、始テ見ルベキ物トナル。コレ即チ雲ナリ。雲ニハ種々ノ形狀アリ、卷雲トテ其形白キ羽毛ノ如ク、又ハ網ノ如クニシテ淡キモノアリ。

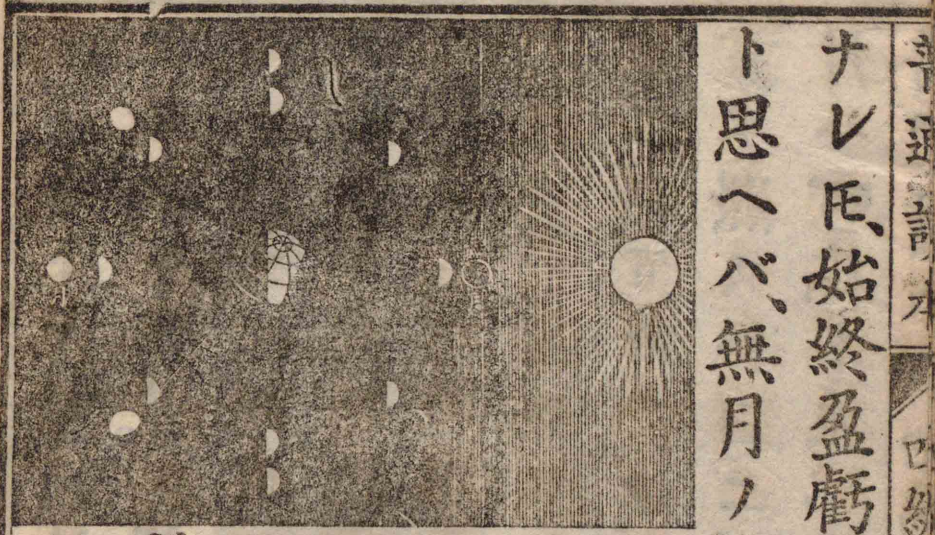
層雲トテ夏日地平ニ起リテ、山脈ノ起伏セル如キアリ。其亂雲ト名クルハ、極メテ濃キ雲ニシテ、始メテ起ルハ、藍黑色ナレバ、忽チ中天ヲ掩ヒテ、淡黑色トナリ、遂ニ雨ヲ降スモノナリ。

第十七課 月ノ盈虧。

盈虧。宵。衛星。鏡。映。彰々。箭。

晝ヲ照スハ日ニシテ、夜ヲ照スハ月ナリ。月ハ雪花ト並ベ稱シテ、人ノ愛賞スルモノ





ナレ氏、始終盈虧アリテ、満月ノ明宵アルカ  
ト思へバ、無月ノ暗夜トナリ、人ヲシテ常ニ  
輪光ヲ取ルノ愉快アラシ  
メズ、今其由ヲ語ルベシ。  
月ハ略一ヶ月ニ一回地球  
ノ周圍ヲ旋ル一ツノ衛星  
ニシテ、形ハ日ト同シク圓  
體ナレ氏、固ヨリ自己ニ光  
ヲ放ツモノニアラス、其光

明ヲ見ルハ、日ノ光ヲ受ケテ之ヲ反射スル  
ニヨルナリ。暗室ノ鏡ハ、物ヲ照サレ氏、  
之ニ燭火ヲ映ゼバ、忽チ彰々タルヲ見ルベ  
シ、月ノ光モ亦此理ニ外ナラザルナリ。前  
圖ヲ見ヨ、月ノ半面日ニ向フ處ハ、常ニ光ア  
レ氏、元來月ハ一ヶ月ニ一回地球ノ周圍ヲ  
旋ルコト、箭モテ示ス如クナルガ故ニ、其光  
面ノ吾人ニ對スル時ト對セザル時トアリ、  
是レ満月、無月アル所以ナリ。又無月ヨリ

普通讀本 日篇 三三

滿月ニ移ル間ニ其光面ノ僅ニ現ハル、時アリ、半バ見ハル、時アリ、或ハ半面ヨリ多ク見ハル、時モアリ、斯ク月ハ盈虧ニヨリテ種々ノ形ニ見ユレ、月ノ本體ニハ毫モ變化アルニアラザルナリ。

第十八課 三界の答詞。

距。普魯西亞。隆運。巡遊。臨幸。忝。疎。后。埃。鸞輿。會釋。躬。宸。衷。憚。纒。敏。慧。

今を距ること百三十餘年前、普魯西亞國の

フレデリック大王と稱せしは、當時歐洲に於ても、賢明の聞え高く、普國今日の隆運を開きとる君にして、深く心を學事を用ひられたり。嘗て國內を巡遊して、一の小村に至りしに、村民の臨幸の忝きを喜び、旅情を慰め、君恩に報い奉らんとて、饗應頗る疎かならば、村童も舉りて、我が后を埃つの歌を唱へて、鸞輿を迎へんとす。やがて大王は、村内に學校に臨まれ、子弟勉學の狀を觀て、甚ど

喜びたまひ、教師に會釋ありて、親く生徒を  
 試さんこと我望まれ、先づ案上の蜜柑一を  
 取て、生徒に示して仰せらるゝふ、此物の  
 何界に屬するぞ。時よ一人の少女、徐よ進  
 りて、植物界に屬せりと答ふ。大王又懷中  
 より、金貨を出し示して、是は何界に屬する  
 ぞと問ふ。少女輒ち鑛物界に屬すと答へ  
 奉る。是よ於て大王躬ら玉體を指し、朕は  
 は何界に屬すると問ひ、宸衷暗ふ、必だ動物

界に屬すと答ふるならんと思料し給へり。  
 然るよ少女は黙して答へ奉らず、其意實  
 よ國王を指して、動物に屬すと云ふは、憚り  
 ありと思ひ煩むなり。大王面を和らげ  
 重ねて問ふて宣はく、我が愛をべき少女、汝  
 答ふるこや能はぬや。少女は大王の慈  
 顔と温言とに心を取直し、纔に仰て唇を開  
 き、大王は蓋し天界に屬せりとぞ答へたる。  
 この時大王は、少女の敏慧忠誠よ出たる

答に感喜して、两眼小涙を浮べ、手を少女の  
首に加へ、今天朕に許さよ、天界に屬すべき  
を以てせりと、仰せらまじり。

第十九課

鐵道ノ勇少年。

矮。痣。醜。冠。蓬。態。繕。栗鼠。衣裳。荒。倩。金剛石。磨。  
見榮。石塊。

アングー、モアト呼ベル小兒アリケリ。  
身ノ長矮クシテ顔ニ痣サヘアリ、醜キ田舎  
童兒ナリ。帽子ハ冠ル時モアリ、又冠ラザ

ルコトモアリテ、頭髮濃ク蓬ノ如ク生エタ  
レバ、帽子ハ用ヒザルモ、風ニモ感ズマジ、日  
ニモ負ケマジトゾ思ハレケル。此兒身ノ  
態ナドハ、少シモ取繕ハズ、サレバ栗鼠ヲ捕  
へ、鳥ノ巢ヲ探ルコトニハ慣レタレドモ、衣  
裳ノ流行ナドハ、オサく知ラデアリケリ。  
アングーガ家ハ、丘ノ側ナル荒レ果テタ  
ル小舎ニシテ、丸木ト泥ヲモテ造リ、窓ハ孔  
ヲ穿チタルノミ、見ル影モナキ有様ナリ。

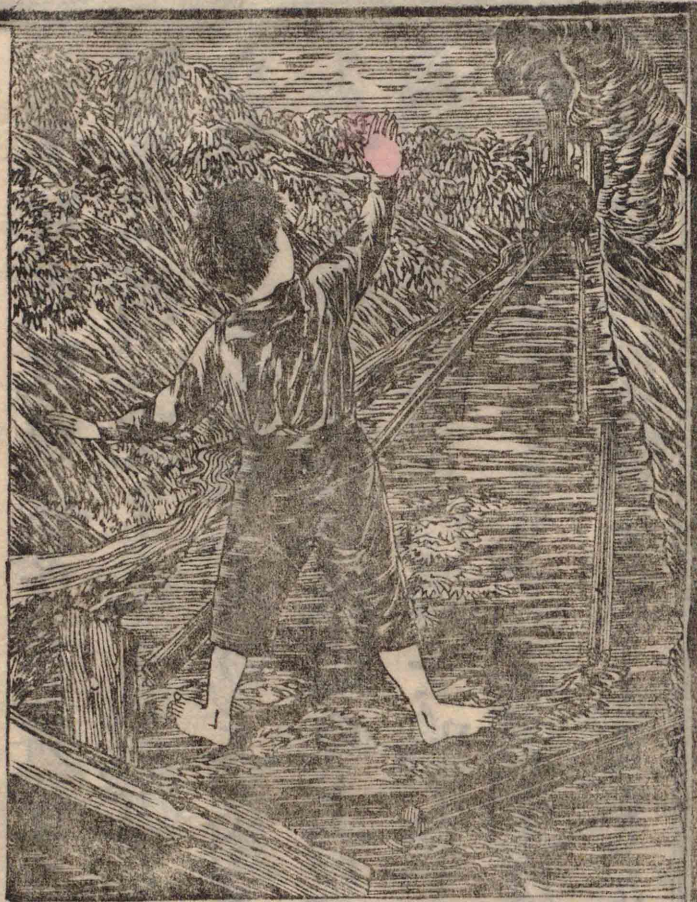
サレバ斯ル泥小舎ニ住ム、哀レナル田舎童  
兒ノ争カデ人ノ手本ト爲ル所業アラシヤ  
ト、恠ミタマフ人モアルベシ。サレド退イ  
テ情考へ見ラレヨ、金剛石ノ貴キモ、磨キテ  
玉トナサズリセバ、唯是一個ノ見榮モナキ  
石塊ナリ、アンヂーニハ裂ケタル衣ノ下ニ  
モ、貴ブベキ勇士ノ精神ヲ蓄フルヅカシ。

第二十課 前課ノ續

轟。軌道。齡。兼。覆。響。方便。

アンヂーガ父ノ住居ニ近ク鐵道アリ。此  
小兒モ常々機關車ノ黒キ煙吹キツ、谷間  
小山ヲ轟カシテ、勢ヒ狂フガゴトク、馳セ來  
ルヲ眺メ居タルコトアリ。此小兒一日鐵  
道ノ上ヲ通りケルニ、軌道ノ損ジ居タルヲ  
見出シタリ、齡尚ホ幼ケレバ、固ヨリ鐵道ノ  
事ナド、多ク辨へ知ルベキ様ナシ。サレド  
軌道ノ實ニ損ジ居ルハ、マノアタリ見ル所  
ニシテ、兼テヨリ鐵軌ノ外ヅレ居タル爲メ、

汽車ノ覆リテ、大ナル害ヲ被リシ事アリナ  
 ド、小耳ニハサミ居レリ。恰モ此時遙ニ響  
 キ聞エワタリテ、列車ノ來レルニ疑ヒモナ  
 ケレバ、サテ其身ハ幼キ小兒ナレ氏、如何ニ  
 カシテ車ヲ止ムル方便モカナト、思索シケ  
 ルガ、近キニ別ニ人モアラ子バ、自ラ止メザ  
 レバ止ムル人ナシ、イデ我自ラ之ヲ止メテ  
 クレント、膽太クモアングーハ、獨リ心ヲサ  
 ダメケリ。アングーハ、其身列車ノ爲メニ、



ニ、小ナル手ヲ開キツ、身動キモセズ立タ  
 リケリ。

ヒキ殺サル、  
 危険アランコ  
 トニハ、少シモ  
 心ヲ留メズ、直  
 ニ軌道ノ中央  
 ニ進ミ、破レタ  
 ル鐵軌ノ邊リ

第二十一課 前課ノ續

汽笛。大磐石。据。碎。婦女。抱。紳士。妻子。顧。陰。歎  
賞。財布。贈。禮。述。所在。精神。

列車は漸く進み來りて、近くなるまゝに音も愈烈しくなり、車の上なる機關士は、又遙よ一人の小兒が、鐵道の上に立てるを見て、大に驚き、急よ汽笛を鳴らして、外に出よと知らせけきども、アンヂーは一寸も動らば、汽笛再び聲を烈しくしなまきども、アンヂ

いは大磐石を据ゑたる如く、一向耳よも留めざりたる。さきば機關士もせんすべなく、其儘車を止めたり。機關士は直よ車より跳び下り、アンヂーの方に走り向ひ、斯る妨げふて手間取り、汽車の後きとるを甚ど怒りたるが、既よして此膽勇ある小兒の爲めに、己れが命も、乗客の命も助たらせたるを知りしかば、怒りは忽ち解けて、喜びと變りぬ。車中の人は、皆何事やらんと立ち出

で見まば、こは如何よ、若しアンヂーが車を止めざりせば、列車の忽ち險しき阪を落ち降りて、碎け散りなんも社をそ、膽をむやし驚らぬはなうま々り。婦女子は、走りてアンヂーを抱きさすりて喜び泣き、紳士は、互に妻子を顧み、此兒の蔭よて、皆無事こそ得とまると、歎賞の聲は、い鳴りも止まざりたり。乗客皆々財布を取り出し、夥多の金錢を寄せ集へて、アンヂーに贈りたり。

是れアンヂーの功の賞とせしむのあらはに金錢如何よ貴きも、命に代ふるの報といは難し、然まば口よては、禮も述べ盡せねば、斯くして萬分一の誠を表現したるなるべし。アンヂーが、斯く勇まじき業を爲してより、早十五年よあきり、若し其所在を知らましく思ふ人何らば、告げまらせん、彼は今其鐵道の機關士となりて、三歳兒ノ精神百までの譬よ洩まび、深沈勇果の人とぞ聞



えらる。

第二十二課 山林ノ説

自餘器什調設凋瘦凶歉斧斤樵枹楨楸

山林ハ國ノ材源ナリ朝夕薪炭ノ料モコレヨリ生ジ造家築屋ノ材モコレヨリ出入自餘日用器什ノ製造ヨリ飲食膳具ノ調設ニ至ルマデ總テ資ヲコレニ仰ガザルハナシ若シ山林凋瘦シテ木材盡クルニ至ラバ

百工業ヲ營ムコト能ハズ食アルモ製シ難ク寒ニ遇フモ防グニ由ナシ其窮苦ハ米穀ノ凶歉ニ讓ラザルベシサレバ孟子ノ言ニモ斧斤時ヲ以テ山林ニ入ラバ材木用フルニ勝フベカラスト云ヘリ山林ヲ養フノ法豈ニ忽ニスベケンヤ山林樹木ノ種類多シト雖モ之ヲ大別スレバ針葉樹潤葉樹ノ二種ニ出デズ就中我が邦ノ氣候地質ニ適當シテ最モ能ク生長スル者ハ針葉樹ニシ



テ、殊ニ松、杉、檜ノ三樹ヲ最ニス、建築ノ用材  
ハ、首ニ此三樹ニ資リ、樅、榎、ヒバ、槇、サハラ等  
之ニ亞グ、又濶葉樹ノ有用ナルハ、櫻、楮、ブナ、  
樺、檜、櫟、ハンノキ等ニシテ、或ハ家屋、船車、器  
具等ヲ作ルノ材トナシ、或ハ專ラ薪炭ノ料  
トナス。

第二十三課 松樹ノ説。

幹。盤踞。一苞。析。腐敗。紫。翠。鈍。彈力。

松ハ針葉樹ノ一二ニシテ、其種類頗ル多ケレ

氏、材料トシテ最モ便益ナルハ、黒松、赤松ノ  
二種トス。黒松ハ俗ニ雄松ト云ヒ、其幹或  
ハ直立シ、或ハ盤踞シテ枝四出シ、葉ハ一苞  
ヨリニ針ニ分レテ、色常ニ緑ナリ。春初、花  
開キテ實ヲ結ビ、實ノ形鱗ヲナシ、次年ノ秋  
季ニ至リ、此鱗析ケテ子落ツ。其材ハ白色  
ニシテ、中心淡紅ヲ帶ビ、質堅ク脂多クシテ、  
能ク水濕ニ耐フ、故ニ効用極メテ廣ク、以テ  
諸器械ヲ作ルベシ、其脂ハ採リテ物ニ塗レ

バ能ク其腐敗ヲ防グ、又材用ニ堪ヘザルモ  
 ノハ薪柴トナスベシ。赤松ハ俗ニ雌松ト  
 稱シ、形狀性質大抵雄松ニ同ジ、但其外皮ハ  
 赤色ヲ帶ビ、葉ハ翠綠較淡クシテ、針尖亦鈍  
 ナリ。材ハ淡赤ニ微黄ヲ帶ビテ彈力アリ、  
 黒松ニ比スレバ、品質優レルヲ以テ、其價モ  
 亦貴シ、其木理ノ美ナル者ハ、室内裝飾ノ料  
 ニ供フ。

第二十四課 杉樹の説

霄。凌。緒。累。重。稠。鈴。神代杉。漬朽。韻致。好事家。

杉も亦針葉樹の一にして、其用最も廣し。  
 其幹直立して、大なるは高く霄を凌ぐ、此勢  
 あり皮ハ緒色にして層々累重し、枝ハ四出  
 して稠げく、葉ハ短くして針狀を爲し、其色  
 緑なり。春初花と同時に實を結び、其狀  
 恰も小鈴の如し、此實熟をるふ及で、折々  
 子落つ。材の淡赤にして香氣強く、脂最も  
 多くして堅き質なるを、俗ニ赤杉と呼び、白

色にして脂少く、脆き質なるを白杉と云ふ。  
總て杉は木質軟よして、其量軽く、斧斤を  
施すよも、運搬するにも、共に便よして、且つ  
能く水濕に耐ふるを以て、家屋、船艦、橋梁の  
材より、日用器具の料よ至るまで、其用に上  
らざるはなし、又其皮ハ屋よ葺きて久よき  
耐ふ。世人の神代杉と稱するも、此ハ永  
年土中よ埋没して、潰朽せざるえのなり、其  
色黒くして香氣烈し、木質頗る韻致あるを

以て、好事家の往々其價の貴きを厭む器  
具に作りて珍重せり。

第二十五課 檜樹ノ説。

直挺。斜。疊積。鱗次。香芬。潔白。鑿。腐蝕。繩索。炬。  
克。星霜。支。専門。

檜樹ハ、日用諸材中ノ最良ナル者ニシテ、亦  
針葉樹ノ一二屬ス。幹直挺シテ高キ八十  
數丈ニ達シ、圍リ二丈ニ餘ルモノアリ、皮淡  
黒ニシテ赭赤ヲ帶ビ、枝ハ密生シテ斜ニ地

ヲ指セリ、葉ハ扁小ニシテ疊積鱗次シ、四季  
共ニ翠然タリ、春初花ヲ着ケ實ヲ結ブ、其形  
杉ノ實ニ似テ小ナリ。材質硬軟宜シキヲ  
得テ、工作ヲ施シ易シ、木理直達シ、膚色潔白  
微シク黃紅ヲ帯ベリ、其斧鑿ノ痕滑カニシ  
テ清白ナルヲ以テ、多ク神殿等ヲ造ルニ用  
フ、且ツ最モ腐蝕ニ耐フルガ故ニ、凡ソ船艦、  
橋梁ヨリ、家什器具ニ至ルマデ、用ヒザル者  
ナシ、又製シテ繩索トナシ、編テ笠トナシ、織

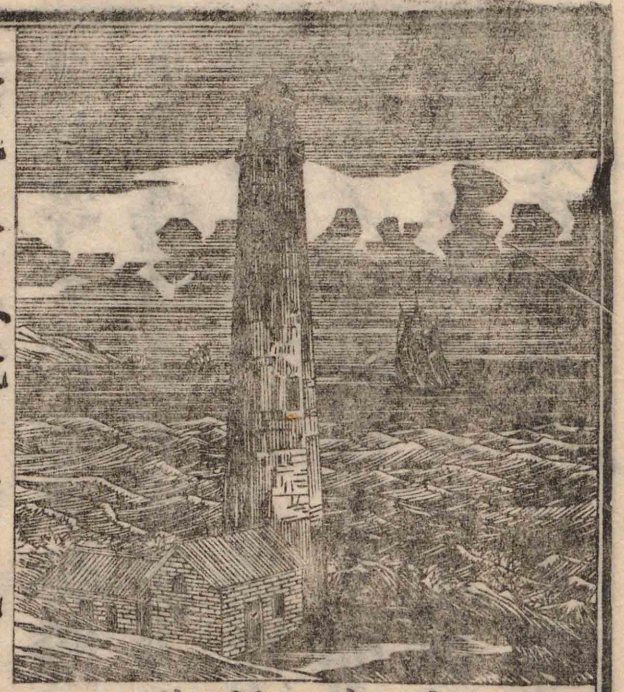
テ席トナシ、其他薪炭炬火ノ料トナスベシ  
特ニ其皮ハ屋ヲ葺クニ、外觀甚ダ佳ニシテ  
克ク數百年ノ星霜ヲ支フルト云フ。凡ソ  
檜ヲ以テ器具ヲ製スル工人ヲ、古來檜物師  
ト云ヒテ、専門ノ職業ヲナセリ、亦以テ檜材  
ノ用廣クシテ、邦人ノ貴重スル所以ヲ見ル  
ベキナリ。

第二十六課 燈明臺。

燈明臺。目標。凹凸。暗礁。政府。洵。岬磯。干潮。排

除疑懼。回轉光。

燈明臺ハ、船舶往來ノ目標トナリ、之ヲ保全  
スルニ、必須缺ク可ラザルモノナリ。若シ  
暗夜ニ風烈シク、船海岸ニ近ヅク時ニ當テ、  
燈明臺ナカリセバ、覆没破壊ヲ免レザルベ  
シ。我ガ邦、西北ハ日本海ニ濱シ、東南ハ太  
平洋ニ臨ミ、周圍皆水ニシテ、海岸凹凸出入  
シ、無數ノ島嶼、其間ニ散在シテ、暗礁ノ如キ  
モ、亦少シトセズ、故ニ航海ハ頗ル困難ナリ



其地位ハ、概子岬磯岩礁ノ上ニアルヲ以テ、  
苔蘚滑ニシテ怒濤之ヲ洗ヒ、往々終日ノ中  
水ヨリ出ヅルノ間、干潮數刻ニ過ギザルモ

トス、我ガ政府、毎年巨  
額ノ資ヲ投ジテ、燈明  
臺ヲ設置維持スルハ、  
洵ニ是ガ爲メナリ。

燈明臺ハ石煉瓦若ク  
ハ鐵ヲ以テ之ヲ築ク

ノアリ、サレバ初メ未ダ建タザルノ前ニ見  
 レバ、其成功殆ド期シ難キノ懐アラシム。  
 然レ凡人智ノ巧慧ナル、工術ノ進歩セル、能  
 ク此等ノ困難ヲ排除シ、今ヤ燈明臺ハ、如何  
 ナル場所ニモ、建築シ得ルニ至レリ。暗夜  
 ニ風烈シク、殊ニ海岸ニ向テ吹ク時ハ、船ニ  
 在ル人皆疑懼自ラ安ンゼズ、徘徊四顧、燈明  
 臺ノ光ヲ望ムニ及ンデ、心始メテ坦カナリ。  
 是時、船長時計ヲ取り出シテ、之ヲ觀察ス

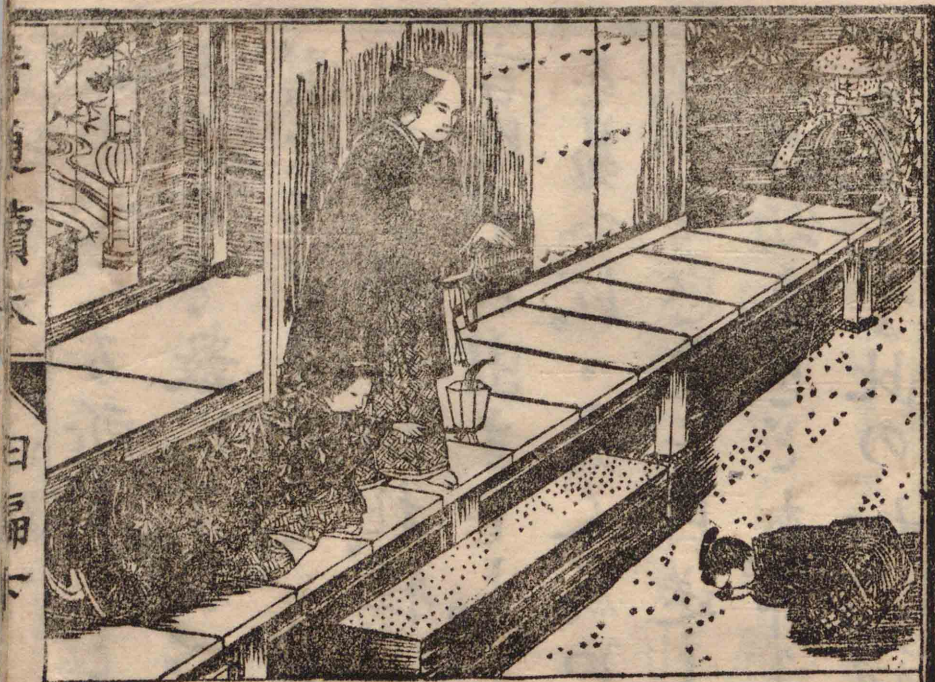
ルコト須臾ニシテ、輒チ曰ク、彼ハ回轉光ナ  
 リ、其回轉スルコト、何分時ニ一回ナリ、余ハ  
 彼ノ光ノ何タルヲ知り、亦余輩ノ所在ノ何  
 地タルヲ知ルト、誠ニ是レ航人、船客ニ至便  
 ナルモノト謂フベシ。

第二十七課 松平信綱ノ話。

伊豆守。松平信綱。甫。徳川秀忠。便室。檐。雀。巢。  
 兼。忙。尋。詰。貴。救。解。縦。良。輔。天。草。慶。安。獄。

伊豆守松平信綱は、幼名を長四郎と云へり。

年甫めて十一、將軍徳川秀忠に召されて、世子竹千代に給事せり。或る時竹千代父將軍の便室に檐に雀の巢を作まるを見て、長四郎に命じ、往きて雀兒を捕へしむ。信綱夜小乗じて屋に升りけるが、脚を失して地に墜ちぬ。秀忠其響きを聞き、驚き起ち刀を提げ夫人をして燭を秉らしめ、出で、見よと信綱あり。信綱忙しむ容を改め、地上に拜伏せり。乃ち其來由を尋ぬる小臣



晝間御殿の檐に雀兒の巢に在るを觀心よ愛して忘るゝこと能はず、今來り竊に捕へんとせしなりと答ふ。秀忠まゝと誰り之を命せしえのあらんと問ふに、臣自ら己の意小出で、之をなせり。

普通讀本 四編下

集英堂藏版



命を受くる所なしと答ふ。秀忠仍ほ詰責  
 せりこと數次よ及びども答ふること初よ  
 異なることなし。秀忠怒りてこそ捕へ  
 大なる囊に納れ、柱よ懸けて云ふ、汝明白よ  
 言はむば出さじと。然れども信綱竟よ辭  
 を易へば、夫人爲めに救解して之を縱て  
 り。秀忠之を目送して、夫人よ語りて曰く  
 かれ幼きをども節よ臨よ能く守りて、屈せ  
 ざるこそ此の如し、後必ず良輔とならん。

信綱長むるよ及び果して名臣となりて、  
 天草の亂を平らげ、慶安の獄を治め、其餘功  
 勞舉げて數へ難し、世人稱して智慧伊豆と  
 いへり。

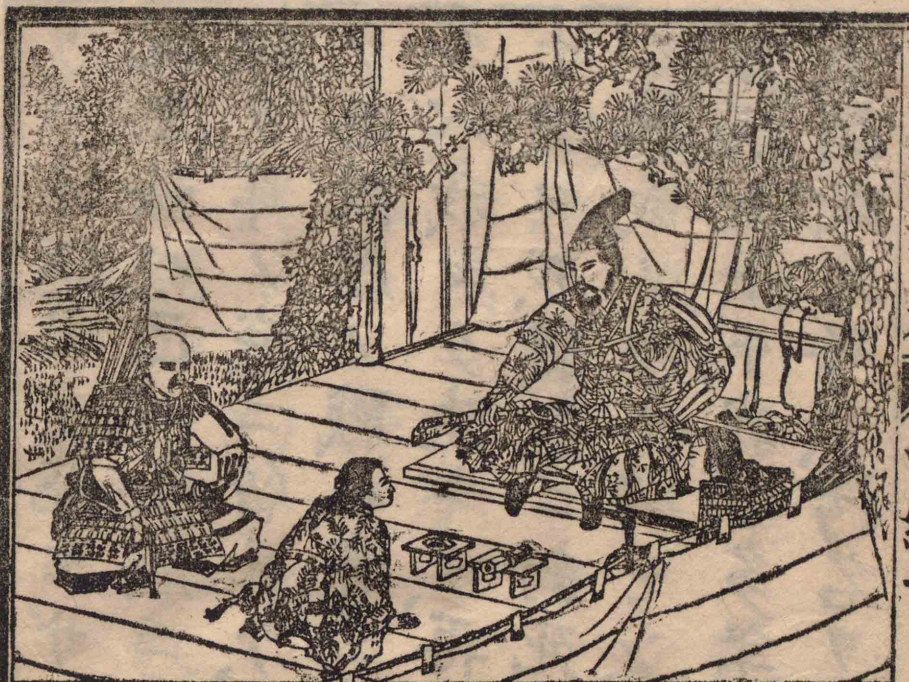
第二十八課 櫻井驛訣別

訣別。足利尊氏。直義。逼。朝廷。楠正成。兵庫遣。  
 戮。正行。櫻井ノ驛。河内。誠。蹴。討死。沱。一族。徒  
 黨。引籠。記念。湊川。血戰。憂。亡。

延元元年足利尊氏其弟直義ト西國ノ兵八

十萬ヲ率井テ、將ニ京師ニ逼ラントス。朝  
廷、楠正成ヲ兵庫ニ遣ハシテ、新田義貞ト力  
ヲ戮セテ、之ヲ防ガシム。此時正成ハヤ心  
ニ戰死ヲ覺悟シタリケレバ、長子正行ガ今  
年十一歳ニテ、供シタリケルヲ、思フム子有  
リテ、櫻井ノ驛ヨリ河内ヘカヘシ遣ストテ、  
誠ヲ遺シテ曰ヘルヤウ、獅子ハ子ヲ産ミテ  
三日ヲ經レバ、之ヲ數千丈ノ谷ニ蹴落シテ、  
其子ニ獅子ノ本性アレバ、教ヘザルニ中ヨ

リハ子返リテ、死セザルヲタメストイヘリ、  
況ヤ汝ハ、己ニ十歳ニモ餘レリ、ヨク我が教  
誠ヲ耳ノ底ニ留メテ、ユメ違フコトナカレ、  
ソモ此度ノ戰ハ、實ニ天下安危ノ係ル所ナ  
レバ、我マタ生キテ、再ビ汝ヲ見ルコトハカ  
ナフマジ、我既ニ討死スト聞カバ、天下ハ終  
ニ尊氏ノ手ニ歸セン、然レモ一旦ノ命ヲ助  
カラントテ、我が多年ノ忠義ヲ水ノ泡トシ  
テ、朝敵ニ降り、汚名ヲ後代ニノコスコトナ



カレ、一族徒黨ノ者、一  
 人ニテモ生残りテア  
 ランホドハ、金剛山ノ  
 ホトリニ引籠リテ、再  
 ビ忠義ノ旗ヲ舉ゲヨ、  
 是ゾ汝ガ第一ノ孝行  
 ナルゾト、泣クク言  
 ヒフクメ、帝ヨリ賜リ  
 タル、菊作りノ刀ヲ後

ノ記念トテ取ラセ、各東西ニ別レケルガ、後  
 正成進ミテ湊川ニ陣シ、直義ト血戦シテ、果  
 シテ討死セリ。 嗚呼、正成敵ノ大軍、都ニ近  
 ツクト聞キ、天下ハ必定、賊ニ歸センコトヲ  
 憂ヒ慮リ、我が亡キ跡マデモ、其子ヲ留メテ  
 義ヲス、ム、比ヒスクナキ忠臣ニコソ。  
 ち里ぬをた討伐教へく志むしよよ  
 能くはこら木のさくら井はさや  
 まみごよめちまをいへてそまよづ

新編 貞實 日編 聖 集長 全歳反

あらしよむのふさくら井の宿。

第二十九課 弘安ノ役

忽必烈范文虎寇鎌倉議執權北條時宗書辭容斬憤怒壹岐對馬掠太宰府犯少貳景實虜實政探題督部署河野通有奮進殪辟易據颶風漂蕩吶喊殲武威

弘安四年元朝ノ主忽必烈其臣范文虎ヲシテ兵十萬ニ將トシテ來リ寇ス。是ヨリ先元主屢書ヲ吾ガ朝ニ送リ好ヲ通セント請



フ。朝廷之ヲ鎌倉ニ下シテ議セシム時ノ執權北條時宗其書辭ノ無禮ナルヲ見怒リテ容レズ前後遣ハス所ノ使ヲ斬ルコト數人。元主憤怒シ兵ヲ遣ハシテ我が壹岐對馬ヲ掠メ進デ太宰府

ヲ犯ス、少貳景資出デ、之ヲ拒ギ、射テ虜將  
ヲ殺ス、虜軍宵逃ル。既ニシテ時宗大二兵  
備ヲ嚴ニシ、北條實政ヲシテ九州探題トシ  
シ、將士ヲ督シテ沿海ニ備ヘシム。是ニ至  
リテ、虜兵大舉シ、軍艦海ヲ蔽フテ來ル、實政  
乃チ諸軍ヲ部署シ、海陸兵ヲ合セテ大二虜  
軍ト戰フ、我ガ將河野通有奮進シテ虜艦ニ  
登リ、手ニ數十人ヲ殪ス、虜兵辟易シ退テ海  
島ニ據ル、會颶風大二起リ、虜艦漂蕩盡ク壞

ル、我ガ軍勢ニ乘ジテ呐喊之ヲ擊ツ、海水皆  
湧ク、遂ニ之ヲ殲ス、虜兵十萬能ク生キテ還  
ル者僅ニ三人ノミ、是ヨリ皇國ノ武威益顯  
ハル。

第三十課 神武天皇

神武天皇。日向。高千穂。東征。瓊々杵尊。躡駐。  
西偏。僻遠。露。邑。疆。控御。統一。甲寅。帥。攝津。長  
髓彦。邀。拒。攻。辛酉。朝日。大和。橿原。紀元。詔。虞  
祀。靈時。鳥見山。一系。

神武天皇 神武天皇 神武天皇 神武天皇 神武天皇

神武天皇初め日向の高千穂にましくしが、東征を思召立ちて、諸兄及び皇子を集めて死なまはく、我々天祖瓊々杵尊蹕を此國に駐めたまふより以來、多く年代を歴り、然るも此西偏に都を以て、僻遠の地は猶ほ未ど王澤に露をば、邑に君あり、村に長あり、各土地を私有し、疆を分ちて自ら相凌げり、我れ聞く東方に美地あり、四方を控制せらるる便なりと、宜しく就きて之に都し、

以て天下を統一すべし。甲寅の年十月、天皇親ら師を帥めて日向を發し、西海、山陽の諸國を歴て、遂に攝津に着きたまふ。長髓彦等の諸賊、所在兵を聚めて邀へ拒ぐ、皇軍之を撃ち、攻むれば取り、戦へば勝ち、降る者は之を撫し、背く者は之を戮し、終に長髓彦を誅し、六年の後にして悉く中州を平ぐ。其翌々年辛酉の正月朔日、大和の國橿原の宮にて天位に即りせたまふ。是れ神武天

皇の元年にして、即ち我が國の紀元なり。  
四年詔ありて、我が皇祖の神靈天より照臨  
まし、く、朕が躬を助けたまへるより、  
諸の虜どもたやま、く平ぎ、天下に復さ、波  
風、此虞を、し、朕は正しく天神の御子を、  
宜しく天神を祀りて、以て大に孝道を申べ  
明のふすべしとて、即ち靈時を鳥見山に立  
てとまふ。卷首ノ畫ヲ看ヨ 紀元より今茲明治十九年  
に至るまで、二千五百四十六年なり。 抑世

界各國多しと雖も、未だ千古一系の皇帝ふ  
して、斯の如く國を知り召まこと盛なるも  
のはあらば、實は仰ぐべく尊むべし。

皇紀 卷之 一

普通讀本四編下終  
集英堂藏版

小田切潭城書  
松本楓湖畫  
小林櫻湖  
衆原三刻

四日一村  
山中寬市

普通讀本四編下終

明治十九年十一月四日版權免許  
同 年十一月 出版  
同 二十年三月十九日訂正再版御  
同 年十月三十日訂正三版

編者

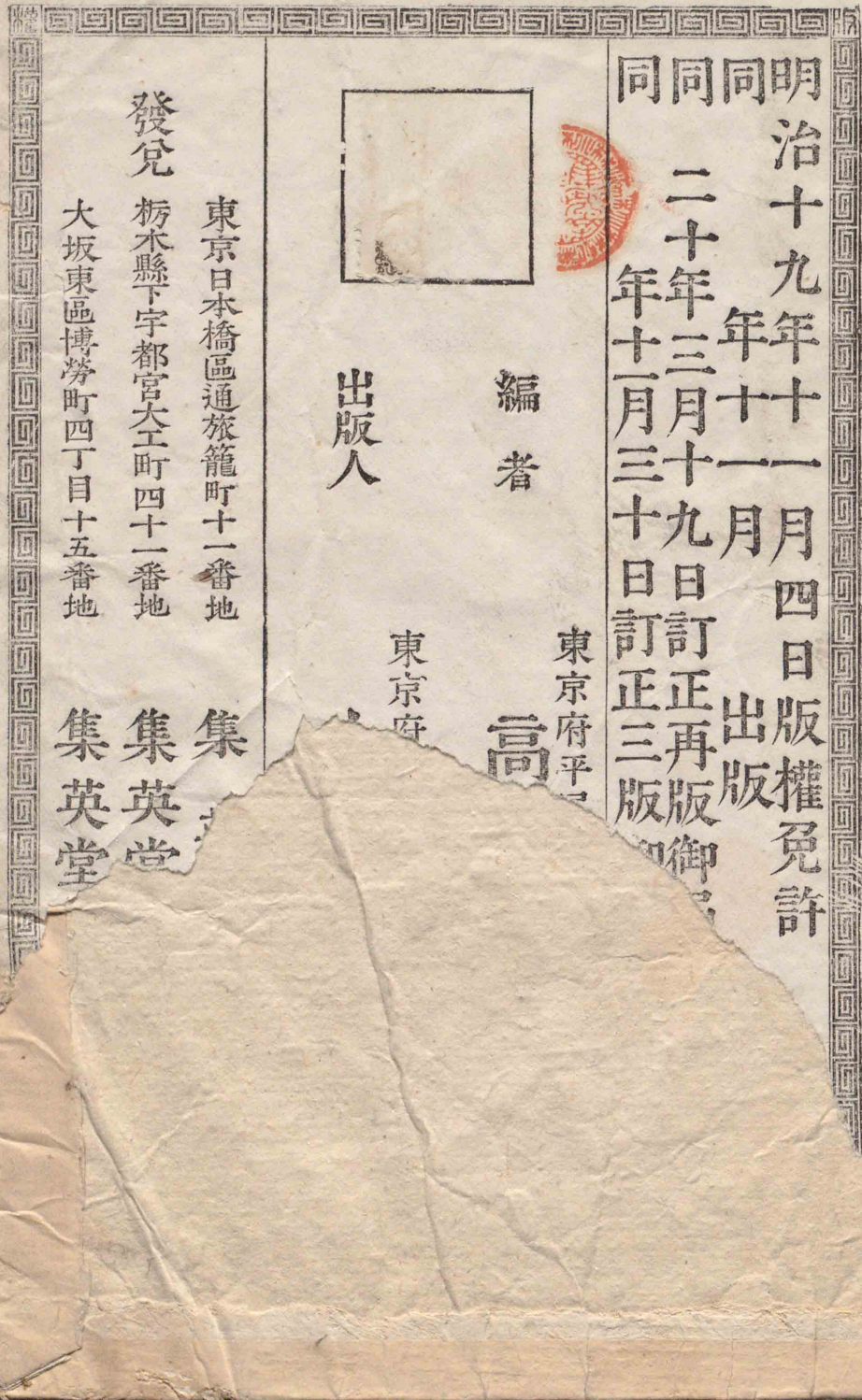
高

出版人

東京府平  
東京府

東京日本橋區通旅籠町十一番地 集  
枋木縣下宇都宮大工町四十一番地 集英堂  
大坂東區博勞町四丁目十五番地 集英堂

發兌



普通



